



## 相互運用可能な水産物トレーサビリティシステムに関する GDST 標準およびガイドライン バージョン 1.0

### エグゼクティブサマリー

信頼できて値段が手頃な水産物トレーサビリティは、今日のグローバル水産業界において競争力を維持したい企業にとっていまや「必須」となっている。企業の社会的責任方針を果たすためであり、サプライチェーンの可視化やリスク管理といった中核的な運営上の問題に取り組むためであり、製品由来に関する証明可能な情報に迅速にアクセスする必要性が業界全体で日々発生している。

新しいデジタル技術がトレーサビリティの能力およびその価値感を前にも増して高めている。だが、現時点で、効果的かつ広範なトレーサビリティの実現には 2 つの大きな障害がある。

- (i) まず、政府、NGO、小売業者、その他の下流企業から寄せられる首尾一貫しない情報需要が混乱と、高いコンプライアンス費用、そして生産者の意欲低下をもたらしている。
- (ii) 連携が取れていないトレーサビリティ・ソリューションおよびソリューション・ベンダーの数が多いため、デジタル情報管理システムの非互換性が生じ、情報の流れが滞ってビジネス関係が硬直しているほか、新規のサプライヤーおよび顧客の受け入れが難しくなっている。

こういった問題を解決するため、2017 年 4 月、24 社が集結し、全ての水産物トレーサビリティシステム間の**相互運用性**および極めて**高い検証可能性**を実現する新たな業界主導標準を策定する目的で Global Dialogue on Seafood Traceability (GDST) が立ち上げられた。GDST は短期間で成長し、水産物サプライチェーン全体の世界 60 社が参加するまでに拡大した。

現在、GDST は**最大かつ最も多様性の高い B2B 業界フォーラムの 1 つ**であり、業界の重要な小売業者、ブランド、サプライチェーン内加工業者が参加している。GDST は以下の 2 つの主要国際 NGO である WWF と食品技術者協会 (グローバル・フード・トレーサビリティ・センター) により召集・支援されたイニシアチブである。

**3 年間に亘るコンセンサスベースの対話を経て、GDST は「相互運用可能な水産物トレーサビリティシステムに関する GDST 標準およびガイドライン、V1.0」<sup>1</sup>を発表した。**

GDST 標準は 2 部から構成されている：

1. GDST 対応 (GDST-compliant) の水産物サプライチェーン内で記録・伝達する必要のある**最低限のデータ要素**を特定するための標準。これらは天然漁獲製品、養殖製品を含め、GDST の「重要データ要素の基本汎用リスト」において技術的に詳述されている。

---

<sup>1</sup> The English language version is the authoritative version of these standards.  
英語のバージョンがこの標準 (standards) の優先されるバージョンです。

2. 相互運用可能なトレーサビリティシステム間でデータを共有するための技術フォーマットおよび命名法を管理する標準。

専門用語で説明すると、GDST1.0はGS1 EPCISとして知られる国際トレーサビリティ規格を基にして拡張構築されたものである。GS1 EPCISは食品・非食品分野(たとえば、製菓業界で大量に使用されるもの)全体の主要小売業者、ブランド、サプライチェーンにより幅広く使用されている。GDSTは、水産業界の「目的に合う」よう、そして企業が私有のGS1トレーサビリティ・ソリューション製品への商業的な関与をすることなく、GS1をベースとしたシステムと統合できるようにするイノベーションを実現するために、EPCIS規格を洗練化および適応させたものである。

GDST標準は事業運営上のニーズを満たしつつ、水産物サプライチェーンに入る製品が合法生産実践により生産されるよう設計されている。この標準を用いて、企業はそのサプライチェーンを可視化しつつ、データアクセス管理を行って商業上の機微情報を保護することができる。またこの標準は、米国水産物輸入監視制度やEU・IUU漁業規則といった輸入規制の遵守を促進するようにも設計されている。

重要な事として、GDSTは「画一的な」ソリューションを課すものではない。GDST 1.0は、ブロックチェーンなどの最先端技術を含む、複数の私有の(そして競合的でさえある)システムにおいて柔軟に実装できる設計上の標準である。また標準の実装には時間が掛かることがわかっており、企業によっては事業の決断や条件にもとづく段階的アプローチが必要になる場合もある。

同様に、GDSTはデジタル化に当たってバランスの取れたアプローチをとる。デジタルサプライチェーンは水産業界の未来であり、紙ベースのシステムに依存し続ける企業は競争上の不利益を一層被ることになる。しかしデジタル化は引き続き難しい問題であり、特に開発途上国の小企業にとってはなおさらそうである。それゆえ、GDSTは、内部企業運営の完全デジタル化を必要とせず、サプライチェーン・パートナー間のデジタルデータ転送のみに焦点を当てている。

GDST標準は技術的にしっかりしており、標準が多様なビジネスのユースケースでしっかり機能するかどうか検証する一連のハッカソンおよび実証試験プロジェクトにより「実地テスト」されている。これらの活動には、GDST対応ソリューションを既に準備している第三者ベンダーを含む、複数の専門家およびステークホルダーが参加した。つまりGDST 1.0は、サプライチェーン企業と第三者ソリューションプロバイダーの両方が「すぐに採用できる」ものだ。

GDST 1.0標準は水産業にとって画期的な機会となる。企業が直面するトレーサビリティに対して商業上および規制上の需要が増す中、GDST標準は相互運用性を可能にするだけでなく、予想性も改善して公正な競争の場をつくりだす。GDST標準の実装は、企業が責任あるソーシングへのコミットメントを実践するのを助け、またそうした企業が業界のトレンドおよび技術開発と一致したトレーサビリティシステムへの投資をできるようにする。

##

注:GDST 1.0標準は複数の支援文書と共にリリースされたが、この支援文書には、標準、その文脈、基本的質問を非技術的に説明する「説明資料」とGDST実装の実践的課題について技術専門家を支援する「技術実装ガイダンス」一式が含まれる。

GDST 1.0の規格およびガイドラインをダウンロードしたい方、また詳細を知りたい方は、GDSTウェブサイト <https://traceability-dialogue.org/core-documents/gdst-1-0-materials/> にアクセスするか、GDST事務局にメールで連絡してください [info@traceability-dialogue.org](mailto:info@traceability-dialogue.org)。

##